

成田 憲三（なりた・けんぞう）

1、プロフィール

歌人。中央歌誌「香蘭」に参加し、後に「勁草」の同人として活躍した。また、弘前から出た「鬱金香」や「流転」などに関係をし、「弘前短歌会」や「津軽短歌会」を主宰した。

<生没>

1905(明治 38)年1月1日 ~ 1964(昭和 39)年9月 21 日

<代表作>

『成田憲三歌集』

遺歌集『狭庭の花』

<青森との関わり>

弘前市土手町 16 番地に生まれる。慶応大学専門部に在籍をした一時期を除き、大部分を弘前で過ごした。

2、作家解説

歌人。明治 38 年、現弘前市土手町に呉服業成田忠蔵の長男として生まれた。本名は賢蔵。弘前高等小学校を卒業後、家業に従事しながら短歌に親しむ。紫水と号したが後に憲三と改める。弘前から出た「あすなろ」や「鬱金香」に参加をするかたわら、中央雑誌「潮音」にも入会し、やがて「霸王樹」に移っていった。

大正 13 年には商業修業のために問屋奉公するという名目で上京、家族に秘して慶応大学専門部に入学した。在学中に村野次郎や中河与一らを知り、前年創刊の「香蘭」に入社したが、間もなく家事都合で退学し帰郷した。その後は呉服業に携わりながら「香蘭」で活躍し、北原白秋の影響も受けた。更に、穴沢赳夫や木村颯三らと弘前短歌会を結成するなど地方短歌界のために尽くしていった。

昭和 4 年、宇都野研が「勁草」を創刊するやこれに参加し、同人として気を吐く。同 11 年には勁草弘前支部を結成し、12 年 5 月には宇都野研を弘前に迎えるなど、

その精神は常に中央的視点に立ちながら地方歌壇の隆盛を目ざした。その間、同 10 年には沙和宋一の「東北文学」に同人として参加し社会批判的短歌も作ったが、生涯を通じて見ればその傾向の歌は少なく、淡々とした自然詠や身近の小さな物事に愛情を傾けるような歌が多かった。

昭和 16 年、戦時下のために家業を廃してからは公共職業安定所関係の職に就いた。戦後の 22 年には青森県歌人協会の「青森歌人」発行人となる。29 年には、流派をこえた歌人の大同団結を願って津軽短歌会を結成して「津軽短歌」を発行した。

亡くなる前日まで自宅で月例歌会を開くなど、率直でいつわりのない心で次代の歌人の育成を念頭にして努力をし、津軽的反骨精神を貫きとおした歌人である。

3、資料紹介

○『成田憲三遺歌集 狭庭の花』

図書

1965(昭和 40)年9月 20 日

185mm×130mm

成田憲三没後に、津軽短歌会のメンバーが中心となって編集した遺歌集。初期の歌から晩年までの 40 余年に渡る作品の中から、903 首を厳選して収める。成田憲三年譜のほかに、妻の感謝のことは、中畑長四郎の後記を付す。